

世界動物文学全集
29



講談社

世界動物文学全集29

ジャングル・ブック
オオカミの兄弟
ダアシェニカ
ツァボの人食いライオン

昭和56年 3月18日 第1刷

著者 ラドヤード・キプリング
ジーン・トンブスン
カレル・チャペック
J・H・パターソン

訳者 高島文夫
辺見 栄
小川浩一
大岩順子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号112
電話東京 (03) 945-1111 (大代表) 振替東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 1780円



© 高島文夫 辺見栄 小川浩一 大岩順子 1981年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

0397-405298-2253 (0) (文2)

目次

ジャングル・ブック

5

オオカミの兄弟

159

ダアシェニカ

247

ツァボの人食いライオン

273

解説・藤原英司

381

装幀 蟹江征治

イラスト 田中豊美



ジャングル・ブック

ラドヤード・キプリング
高 島 文 夫 訳

原題 THE JUNGLE BOOK (1894)

著者 RUDYARD KIPLING

は し が き

このような性質の物語を書くには、どうしても、専門の方々にいろいろなお知恵を拝借しなければならないので、もし編者のがわに、教えて下さったご好意に対して、出来得る限りの感謝の意を、進んで表明する気がないとしたら、いろいろご教示にあずかる資格など、まったくないとになるであらう。

編者は、まず第一に、インド政府登録簿に荷物運搬ゾウ一七四号と記載されている、いかにも学者らしく、しかも老成したバハドゥール・シャールに感謝しなければならぬ。このゾウは、やさしいその妹パドミーニーとともに、『ゾウのトーマイ』の経歴と、『女王さまの召使たち』に含まれている聞き込み資料の大半を、極めて丁寧に提供してくれたのだ。モーグリモーグリの冒険は、さまざまな時に、さまざまな場所で大ぜいの人びとから提供していただいた資料を集めたものだが、それらのほとんどの方々が、厳重に匿名を守ってほしい、というご希望をもっていられる。だが、

なにぶんこれだけ離れているので、編者は、古い岩山に住まいの一人のインド紳士に、まことに勝手ながらお礼を申し上げたい気がするのだ。この方は、ジャックソージャックソーの方の斜面に敬われて暮らしていらっしゃるのだが、ご自分の属していられる階級階級——老眼族とでも申し上げようか——の種族的な特徴に対して、いささか厳し過ぎる嫌いはあるが、なるほどとうなずける評価をお与え下さったからである。尽きることのない探究心と勤勉さとを兼ね備えた大学者であり、近ごろ解散したシオニーの群れの一員でもあり、さらにまた、主人とともに口輪ダンスをやって、多くの村々の青年や、美人や、教養ある人びとの興味を引き、南部インドの各地で開かれるほとんどの定期市でもてはやされる芸術家でもあるサーヒールは、人びと、風俗、習慣について、極めて貴重な資料を提供してくれた。これらの資料は、『トラ！トラ！』とか、『カールの狩り』とか、『モーグリモーグリの兄弟たち』の中で、自由に使わせてもらった。『リッキイ・ティッキイ・ターヴィ』の概略については、編者は、北部インドで指折りの爬虫類学者の中のあるお一人の方のご尽力を得た。ちなみにこの方は、恐れを知らぬ、独立独歩の研究家で『知るのではなくは生きておるまい』と決意され、わが国の東洋地方の毒ヘビの研究にあまり熱中なされたために、最近、ついにその生命を犠牲にする羽目となってしまわれた。旅行中、ある幸福なめぐり合わせによって、編者は『エムブレス・オヴ・インディア』号に

乗船していた際、同じ船に乗り合わせた一船客に、多少のお力添えをしてさし上げることができた。そのときの編者のささやかな尽力が、どんなに豊かな報酬をもたらしにくれたかは、『シロアザラシ』をお読みになられた方々がご自分で判断いただきたい。

ラドヤード・キプリング

モーグリモウグリの兄弟たち

コウモリマングが解放はなった夜を、

さあ、運んで来るのはトビのチルだ――

家畜は小屋に閉じこめられて、

われらの天下だ、明け方までは。

今こそ誇りと力の時だ、

爪だ、牙だ、鉤爪だ。

ああ、聞け、狩りの雄叫びを！――よき

狩り、みんなに、

ジャングルの掟を守る者たちに！

ジャングルの夜の歌

父オオカミが昼寝から目を醒まし、身体をボリボリかいて、アーンと一つ欠伸をし、足先の眠気を払い落とすように、前足を右、左と伸ばしたのは、シオニー高原ヒルズの、とても暖かな夜の七時ごろだった。母オオカミは、その大きな灰色の鼻づらを、ころころころげまわりながらクンクン泣

いている四匹の子オオカミをかばうように、その上にのせて、横になっていた。そして、そのオオカミの家族たちが住んでいる洞窟（ほら）の入口に、月の光が射し込んでいた。

「ワァウウー！」と父オオカミが声をあげた。「さあ、また狩りの時刻だぞ」そして、彼が今にも丘を駆け下りて行くとしたときだった。ふさふさした尻尾をした小さな影がひとつ、入口からのこのこ入って来たかと思うと、哀れっぽい鼻声で言った。「どうぞ、お元氣で行っていらっしゃいませ、オオカミご一家の旦那さま。それから、氣高いお子さま方も、おしあわせと、お丈夫な白い歯がお授けになりますように。また世間には、ひもじい思いをしている者も居るということを、お子さま方がゆめゆめお忘れになりませんように」

入って来たのは——血舐（ち）りのタバキというあだ名の——ジャツカル（山犬）だった。このタバキは、そこいらじゅうを駆けまわっては、喧嘩のたねをまいたり、告げ口をしたり、また、村のごみ捨て場からあさってきた、ボロや革の切れっぱしなどを食ったりするので、インドのオオカミたちは、タバキを軽蔑しているのだ。しかし、また、オオカミたちは彼を恐れてもいた。というのは、タバキはジャングル（密林）の中の誰よりも、すぐカーッとかんしゃくを起こす癖があり、いったん、かんしゃくを起こしたとなると、ふだん自分がみんなを怖がっていることなど忘れてしまつて、ジャングルじゅうを駆けまわり、出会うをさい

わい、だれかれの見さかいなく咬（か）みつくからだ。このちびのタバキが、かんしゃくを起こすと、トラでさえ逃げて隠れるのだった。というのは、かんしゃくは、野生の動物たちが突然かかる、一ばん恥（は）ずかしい病氣だったからだ。われわれは、それを恐水病と呼んでいるが、動物たちは、ディワニー、つまり狂氣と呼んで、逃げ隠れるのだ。「じゃ、まあ、入って探してみな」と、父オオカミが、つっけんどんに言った。「だが、うちには食うものなど何もないぞ」

「オオカミさんにはそうでしょうよ」と、タバキは言った。「でも、わたしのような卑（ひ）しいものには、干からびた骨だつて、けっこうごちそうでさあ。わたしども山犬族（イノ）なものである、とてもえり好みなどできるようなご身分じゃねえですからね」タバキは洞窟の奥の方へこそそこそと走って行くと、すぐに、まだちょびり肉のついた雄ジカの骨を見つけ、座り込むと、すっかりご機嫌で、その端をカリカリかじり始めた。

「こりゃ、どうもごちそうさまでした」と、舌舐（な）めずりをしながら言った。「それにしても、お宅のお子さま方は、どなたもこなたも氣高くて、おきれいでいらっしゃるなあ！ パツチリと大きなお目々！ それに、まあ、ほんとに若々しくていらっしゃる！ いや、まったく、王様のお子さま方は、生まれながらに成人だつていうはずすなあ」

ところで、子供たちの前で、その子供たちのお世辞を言われるのは、どんなに縁起の悪いことなのかぐらひは、タバキ本人が誰よりもよく知っていた。それだけに、オオカミの両親がむっとした顔をするのを見ると、しめしめと思うのだった。

タバキは、自分がまいた喧嘩のたねにはくはくしながら、相変わず腰を据えていたが、やがて、毒のある口調で言い出した。

「ときに、大男のシア・カーンが狩り場を変えましたぜ。来月ひとは、ここいらの丘で狩りをなさるんですとさ、わたしや、ご本人の口から聞いたんですがね」

シア・カーンというのは、ここから二十マイルほど離れたワインガンガ川の近くに住んでいるトラだった。

「あいつにそんな権利はない！」と、父オオカミは憤然として、たたきつけるように言った。「ジャングルの掟では、前もってちゃんとした予告をしなければ、住みかを勝手に変える権利なんかないんだ。あいつが来れば、ここいら十マイル以内の獲物という獲物は、みんなおびえて逃げしまふだろう——それに、俺は、近ごろは二人分の獲物を狩らなくちゃならんからな」

「あのひとのおっかさんはね、あのひとのことを『びっこ』と呼んでいたけれど、それなりのわけがあったのことがあったんだね」と、母オオカミが落ち着いた口調で言った。「あのひとは生まれつき片足がびっこだったのさ。それだもん

だから、ウシばかり狙うんでね。それでワインガンガの村人たちは、あのひとのことをかんかんに怒ってるんだけど、そうすると、ここいらまでやって来て、今度はあしたたちの村の人びとまでも怒らせようっていうんだね。あのひとが、どっか遠い所へ行っていたって、村の人たちは、奴めは居ないか、と、それこそジャングルじゅうを血まなこで捜しまわるんだよね、そのあげく、草に火でもつけられりゃ、あたしたちも子供たちも逃げ出さないわけにはいかないんだから。まったくの話、シア・カーンには、とくとお礼を言ってやりたい気がするよ！」

「何なら、わたしが代わりに、そのお礼をお伝えいたしましようか？」と、タバキが言った。

「出て行け！」と、父オオカミが怒鳴った。「とつとつ行って、おまえの親分と狩りでもしろ。その糞おもしろくない話は、今晚はもうたくさんだ」

「行きますとも」と、タバキは落ち着き払って言った。「ほら、下の藪でちゃんとシア・カーンの声がするでしょうが。わたしの伝言なんかいらなかったのでしたねえ」

父オオカミはじっと耳を澄ました。すると、落ち込んで小さな川となっている下の谷底から、そっけない、怒った、一本調子の、鼻にかかったトラの唸り声が聞こえてきた。獲物は何も手に入らないが、もう、そのことがジャングルじゅうに知れ渡ってもかまうもんか、と言わんばかりの唸り声だった。

「馬鹿な奴め！」と、父オオカミは吐き出すように言った。「のっけに、あんなに喚き立てておいて、それから夜なべ仕事にかかる奴がどこの世界にいる！俺たちの獲物の雄ジカも、奴の狙うワインガンガのでぶの雄の子ウシも同じだ、とても思っていやがるのか？」

「シーツ。あのひとが今晚狩りをしようとしているのはね、雄の子ウシでもなけりゃ、雄ジカでもないの」と、母オオカミが口を挟んだ。「人間なのさ」さっきの鼻にかかった唸り声は、調子が変わって、何となくブーンという唸りに似た、咽喉をゴロゴロ鳴らすような音になり、まわりじゅう四方八方から聞こえてくるような感じになった。林の中の空地で野宿している樵やジブシーたちが聞くと、うるたえたあげく、時によっては、却って自分からトラの口そのものの中へ飛び込んでしまう羽目になるような声なのだ。

「人間だと！」白い歯をすっかりむき出しながら、父オオカミが叫んだ。「くだらん！人間を食わなきゃならんだと、しかも、ところもあろうに、俺たちのこの狩り場でも、何も池に、甲虫やヒキガエルが払底しているわけでもないのに！」

ジャングルの掟によって定められていることには、必ずいろいろとそれなりの理由があるのだが、その掟によれば、どんな野獣も、人間を食うことは禁止されていた。許されるのは、ただ、自分の子どもたちに獲物の殺し方を教

えてやる場合だけで、この場合でも、自分の仲間とか部族の狩り場の外に出てやらなければならないことになっている。このように定められた本当の理由は、人間を食うと、きつと遅かれ早かれ、銃を持ってゾウに乗った白い人間たちと、銅鑼や、花火や、たいまつを携えた何百人という褐色の人間たちとがやって来るからなのだ。そうなると、ジャングルじゅうの者が迷惑することになるわけだ。野獣たちが、自分たち同士でなっとくし合っている理由というのは、人間はあらゆる動物の中で一ばん弱く、一ばん無力なものだから、そんなものに、たとえ指一本でも触れるのは、野獣の風上にも置けない、ということなのだ。そしてまた、こうも言うのだ——ほんとの事なのだが——人間を食っていると疥癬にかかり、歯が抜け落ちてしまふ、と。

ゴロゴロと咽喉を鳴らすような音はだんだん大きくなり、しまいにはトラが獲物を襲うときの、咽喉も裂けんばかりの「ガーオッ！」という咆哮となったかと思うと、そのままぱったりと絶えた。

それから、遠吠えが起こった——が、それはトラらしくもない遠吠えだった——シア・カーンの遠吠えだった。「しくじったんだね」と母オオカミが言った。「どうしたのかしら？」

父オオカミが二、三步外へ駆け出して行った。すると、藪の中をころげまわりながら、あらあらしい声で、ぶつぶ

つ咳いているシア・カーンの声が聞こえた。

「まぬけな奴、樵のたき火に飛びかかって足に火傷やけどをしたらしい。たき火と獲物の見さかいさえないのか」と、父オオカミが咽喉声で言った。「タバキがいっしょにいるようだな」

「何か丘を登ってくるよ」と、母オオカミが片耳をピンと立てながら言った。「さあ、用意して」

藪の中で木ががすかにザワザワと鳴ったので、父オオカミはぐっと腰を落とし、いつ何ときでも飛びかかれるように身構えた。と思うと、やがて、もし眺めていたら、世にもふしぎな情景が目に入っただけ——つまり、オオカミが飛びかかっている最中に、はたと止まったのだ。彼は相手が何者なのか、見きわめるひまもなく飛びかかったのだが、飛びかかる途中で、自分でその動作を中断したのだ。その結果、四、五フィートまっすぐ空中に飛び上がり、そのままヒョイト、もとの場所のすぐ近くへ降り立つ格好になった。

「人間だ！」と彼は鋭く叫んだ。「人間の子だ。ほら！」父オオカミのすぐ目の前に、やっとヨチヨチ歩きのできる褐色の人間の子供が、下枝につかまりながら、裸で立っているのだ——オオカミの洞窟へ、それも夜、こんなふつくとした、笑えくぼのあるちびっ子がやって来たのはじめてだ。そのちびっ子は、父オオカミの顔を見上げて、にっこりした。

「あれが人間の子かえ？」と母オオカミが言った。「あたしゃ初めて見たよ。こっちへ連れておいでな」

自分の子を口にくわえて運び馴れているオオカミは、必要なときには、卵でさえ割らずにくわえることができるくらいだから、父オオカミが口で子供の背中をぐっとくわえて、その子を、子オオカミの間にそっと下ろしてやったときも、その子供の肌に、歯の跡ひとつ、ついていなかった。

「ずいぶん小さなもんだこと！ まるですっぱだかなんだね、それに——ちっとも物おじしないじゃない！」と、母オオカミがやさしく言った。人間の子は、母オオカミの暖かい肌にくっつくようとして、子オオカミたちを押しわけ、その間へ割り込んだ。「おやまあ！ うちの子たちといっしょにおっぱいを飲んでるよ。なるほど、これが人間の子なんだねえ。ねえ、おまえさん、自分の子の中に人間の子もまぜて育てて、肩身の広い思いをしたオオカミなんて、今まで居たことがあるかしら？」

「さあ、時どき聞いたことがないでもないが、オオカミ仲間じゃとんと聞かんし、この頃はさっぱり聞かんなあ」と、父オオカミが答えた。「こいつは、ちっとも毛がないな。俺が片足でちよっと触りゃ、いちころだ。だが、見ろよ、奴さん、ちゃんと俺たちを見上げてるぜ、怖くないんだな」と、洞窟の入口から射し込んでいた月の光が、遮られて暗くなった。シア・カーンの角ばった、大きな頭と肩が、

入口にぐいと押し込まれたからだ。タバキが、後ろからキイキイ声でわめいている。「お首領、お首領、たしかに、ここに入っているよりましなよう！」

「シア・カーンがわざわざおいで下さったとは、大へん光栄なことだが」と父オオカミは言った。言葉こそ丁寧だが、目は怒りにらんらん燃えている。「いったい何の御用かな？」

「わしの獲物じゃ。人間の小件がこっちへ逃げて来たのじゃ」とシア・カーンが言った。「両親が逃げおった。さあ、わしの獲物を返せ」

さっき父オオカミが言った通り、シア・カーンは、樵のたき火に飛びかかって足に火傷をしたために、その痛みで気が荒くなっていた。しかし、父オオカミは、洞窟の入口は、狭くて、トラなんかとても入って来れないことを、ちゃんと知っていた。今のところでも、窮屈で、シア・カーンの肩や前足は、どうにも身動きならぬのだ。まるで、人間が樽の中で、取っ組み合いをするようなものである。

「俺たちオオカミ仲間とは、自由の身だ」と、父オオカミは言った。「仲間の首領の命令なら聞くが、ウシ殺しの模様の旦那から、とやかく言われる筋合いはない。この人間の子はうちのものだ——殺したけりゃ、俺たちが殺す」「殺したければ、だど！ よくもよくもぬかしおったな！ わしが殺した雄ウシにかけて言うてやるが、当然自分が手

に入れるべきものを返してもらうために、むさくしい貴様の洞窟へ鼻を突っ込んで、立ちんぼしていなけりゃならんというのか？ 口を利いているのは誰だと思う、恐れ多くもこのシア・カーン様だぞ！」

トラの怒号は、雷のように洞窟の中じゅうにガンガン響き渡った。母オオカミは、子どもたちをばっと払いのけると、そのまま、入口の方へ飛び出して来た。その二つの目は、暗やみに光る一組の緑色の月のように、シア・カーンのざらざら燃えるような目を睨み返している。

「そしてさ、お返事申し上げているのは、鬼神という仇名をちょうだいした、このラクシャ様だよ。ねえ、びっこさん、この人間の子はあたしのもんだよ——あたしのもんは、あたしのもんさ！ この子には指一本触れさせやしないからね！ この子を育てて、いくいくは、あたしたちの仲間といっしょに駆けまわって、狩りができるようにしてやるつもりだよ。そして、しまいいはね、耳の孔をほじってよくく聞いてくんだよ、いいかい、ちっぽけな裸の子狙い専門の旦那さま——いや、カエル食いの旦那——それともサカナ殺しの旦那とでも申し上げたらいいかね——この子がきつと、いまにおまえさんを狩るようになるよ！ さあ、とっとと出てお行き。それとも、あたしがつかまえたサンバー（水鹿）——ふん、はばかりながら、このあたしはね、腹べこのウシなど食うような恥知らずじゃないんだよ——にかけて言うがね、おっかさんのところへ帰る

かね、生まれたときよりもっとひどいびっこになってき、このジャングルの火傷屋さん！ さあ、帰んなったら！」

父オオカミは、あつげにとられて彼女を見つめている。彼は、自分が正々堂々と闘って、ほかの五匹の仲間たちから、彼女を勝ち取ったあの頃のことを、ほとんど忘れかけていたのだ。その頃の彼女は、まだ群れに混じって駆けまわっており、鬼神などというあだ名も、あだやおろそかについていたのではなかったのだ。シア・カーンも、父オオカミが相手なら、あるいは立ち向かったかも知れないが、母オオカミ相手では、立ち向かうわけにはいかなかった。というのは、今の態勢では、彼女が絶対有利な立場に立っている上に、闘うとなれば、彼女が生命がけで闘うことを知っていたからだ。それで、シア・カーンは、唸りながら、洞窟の入口から後ずさりして、すっかり外に出たとたん、喚き立てた。「この内弁慶野郎め！ 人間の子を育てるなどご託を並べてやがるが、貴様の群れが今に何と言いだすか、長い目で見物してやるぞ。あの小伴はわしのものだ。いずれは、わしの齒にかかることになつとるんじゃ。このふさふさ尻尾のどろぼうども奴！」

母オオカミは、ハアハア息をはずませながら、子オオカミたちの間に、ドサツと身を投げ出した。すると、父オオカミが、思いつめたような調子で彼女に言った。「シア・カーンの言ったことで、当たつてることもあるぞ。あの子は群れに見せなきゃならん。そんなにしないで

も、おまえ、この子を育てる気か、ええ？」

「育てるわよ！」と彼女は喘いだ。「この子は、夜、裸で、それもたった一人、お腹をべこべこにしてやって来たんじゃない。それなのに、物おじ一つしないわ！ ほら、あの子ったら、もううちの子を一人、横へ押しつけてるじゃない。それにね、あのびっこの虐殺屋がこの子を殺して、ワインガンガへ逃げて行つてしまっているのに、ここの村の人びとに、子供のかたき討ちだといって、あたしたちのねぐらを、シラミつぶしに捜しまわられたら、どうなるの？ この子を育てる気かって？ そりゃ、ぜったいに育ててみせます。静かにおねんねよ、カエルちゃん。よしよし、モーグリちゃん——おまえの名前は、カエルのモーグリちゃんにしようね——シア・カーン奴がおまえを狩ったけど、いまにね、おまえの方が、あべこべにあいつを狩つてやるのよ」

「でもな、われわれの群れがどう言うかな？」と、父オオカミが言った。

ジャングルの掟によって、極めて明確にこう規定されているのだ——いかなるオオカミも、いったん結婚したら、自分の群れから引退してもよい。しかし、自分の子たちが大きくなり、立って歩けるようになったら、ほかのオオカミたちに顔を見知ってもらうために、ふつう毎月一回、満月の晩に開かれる総会に、子たちを連れて行かなければならない、と。いったんこの顔みせをすませれば、その子た

ちは、好きなところを自由に駆けまわってよい。そして、その子たちが、はじめて雄ジカを殺すまでに、仲間の成人のオオカミが、その子たちを一人でも殺したとなったら大へんだ、弁解はいっさい許されない。犯人は、見つければ直ちに死刑だ。ちょっと考えてみれば、それはそうでなければならぬ、となつていくはずだ。

父オオカミは、子オオカミたちが少し駆けまわれるようになるまで待っていた。そして、それから、総会の晩に、子オオカミたちと、モーグリと、母オオカミを、会議岩のところへ連れて行った——会議岩というのは、小さきまざまの石や丸石が、いちめんころがっている丘のてっぺんで、オオカミならば百頭ぐらゐは隠れることができるのだ。力と頭脳あたまによって仲間一同の首領となっている、大きな灰色の一匹オオカミ、アケーラが、自分の席である岩の上に、長々と横になっており、その足もとには、ひとりで雄ジカを仕とめることのできるアナグマ色の老練者ベテランから、それぐらゐのことなら、俺にだって、と自負している若い黒毛の三歳子に至るまで、さまざまな大きさや色合いのオオカミたちが、四十匹か、あるいはそれ以上も座っている。一匹オオカミのアケーラは、首領の地位についてからもう一年になる。若いころ、二度もオオカミおとしにかかった経験があり、さんざん打ちのめされて、死んだものとして放はなつておかれた経験が一度ある。だから、人間のやり方や習慣を知りつくしている。岩場では、あまり話がは

ずまなかった。子オオカミたちは、父オオカミや母オオカミが丸く輪になって座った、そのまん中で、お互いにくるころ取っ組み合いをしている。時たま思い出したように、年配のオオカミが静かに子オオカミのそばへ寄り、注意深く観察しては、足音も立てずに、もとの場所へもどっている。そうかと思うと、見落とされないようにと、母オオカミが、自分の子を、わざわざ月明かりの中へ押し出すこともある。アケーラが、岩の上から叫んでいる。「掟はわかつてるな！——ちゃんとわかつてるな。よく見るんだぞ、いいか、おまえたち！」すると、心配そうな母オオカミたちも、それに続いて声を張り上げるのだった。「ほんとに——よく見てやって下さいまし、どうか皆様！」

とうとう——ついにその瞬間がやって来たとき、いよいよかと思つて母オオカミのくびのまわりの毛は、針のようになぞったが——父オオカミは、「カエルのモーグリちゃん」(と自分たちが名づけた人間の子)を、まん中へぐいと押し出した。その子は、座ったまま、にこにこしながら、月の光にきらきらする小さな石をおもちゃにしている。アケーラは、前足の間においた首を一本も上げなかつたが、単調な声で叫び続ける。「よく見るんだ！」すると、そのとき、岩場の後ろから、くぐもつたような遠吠えが聞こえて来た——シア・カーンの声だ。「その子はわしのものだ。わしによこせ。自由の民が、人間の子に何の関係がある？」だが、アケーラは耳をびくりとも動かさな

い。そして、ただひと言、「よく見るんだ、いいか、おまえたち！ 自由の民が、自由の民でない者の命令に何の關係がある？ ようく見るんだぞ！」というだけだ。

オオカミたちが、声を揃えて、腹の底からしほり出すような唸り声をあげた。すると、四歳になった一匹の若いオオカミが、さっきのシア・カーンの質問を、そのままアケーラに投げ返した。「自由の民が人間の子に何の關係があるのか？」

さて、ジャングルの掟の定めるところによると、子オオカミが群れに受け入れてもらう権利があるかどうかをめぐって、議論が起こった場合には、その子の両親は別として、群れの中から、少なくとも二人の推薦者が、その子の弁護をしなければならないことになっている。

「誰かこの子の弁護をしてやる者はいないか？」と、アケーラがきいた。「自由の民の中で誰かいらないか？」

だが、返事はなかった。それで、母オオカミは覚悟をきめた。もし闘いということになれば、自分にとって最後の闘いになるからだ。

するとそのときだった。この会議に出席することを許された、オオカミ以外の唯一の動物——つまり、それは、オオカミの子たちにジャングルの掟を教えている、眠たがり屋の茶色のミツグマ（ナマケグマ）のバルーで、このバルー爺さんは、木の実と、根っこ、ハチ蜜しか食べないので、どこでも好きなところへ行き来してもよいのだが、そ

のバルーが、ゆっくりと後ろ足で立ち上がると、唸るような口調で切り出した。

「なになに、人間の子——人間の子だと？」と彼は言った。「よし、それじゃ、わしがその人間の子の弁護をしてやる。人間の子というものはちっとも害をしないものじゃ。わしは口べたじゃが、言うことは本当じゃぞ。その人間の子を、群れの仲間といっしょに走らせてやりなさい。そして、ほかの子といっしょに仲間へ入れてやりなさい。わしは自分で教えてやるから」

「もう一人必要だ」とアケーラが言った。「バルーが名乗りをあげた。バルーは、われわれオオカミの子たちの先生だ。ほかに誰が弁護するのか？」

黒い影がひとつ、ぱっとオオカミたちの車座の中へ落ちた。黒ヒョウのバギーラだった。全身がそれこそインクのように真っ黒だが、光のかげんで、からだの模様が、まるで絹地にあしらった波紋のように、浮き立って見える。バギーラならみんなが知っているが、彼の邪魔をするものは誰もいない。というのは、目端の利くこと、タパキの如く、大胆なること、野生のバッファローの如く、向こう見ずなること、手負いのゾウの如し、という存在だからだ。しかも、その声ときたら、それこそ木から滴り落ちる野生のハチ蜜のように甘く、肌はまた綿毛より、もっと柔らかい。

「やあ、アケーラ、それに自由なるオオカミの諸君」と、